

平成 2 3 年度東京都広報コンクール

実 施 結 果

平成 23 年度東京都広報コンクール実施状況

区市町村の広報力の向上と、都と区市町村との連携による広報活動の充実を図ることを目的に、平成 23 年度東京都広報コンクールを下記のとおり実施した。

1 応募状況

(1) 応募作品数

部門	応募作品数
広報紙部門 区市部	30
広報紙部門 町村部	4
写真部門 一枚写真の部	13
写真部門 組み写真の部	13
映像部門	16
応募総数	76

(2) 応募区市町村数

39 区市町村（20 区・15 市・4 町村）

2 審査会

平成 24 年 1 月 26 日（木曜日）及び同年 2 月 1 日（水曜日）
東京都庁舎内会議室

3 審査委員

「平成 23 年度東京都広報コンクール審査委員名簿」のとおり（2 ページ）

4 審査結果

「平成 23 年度東京都広報コンクール入選作品一覧」のとおり（3 ページ）
なお、(社) 日本広報協会「全国広報コンクール応募要領」の応募基準に該当する各部門の上位の作品については、「平成 24 年全国広報コンクール」に東京都推薦作品として応募する。

5 表彰式

平成 24 年 3 月 8 日（木曜日） 東京都庁舎内会議室

平成23年度東京都広報コンクール応募作品審査委員名簿

部門	氏名	現職等	専門分野
広報紙	大井眞二	日本大学法学部新聞学科教授	マス・コミュニケーション論等
	長岡光弘	グラフィックデザイナー(株式会社たき工房)	広報紙のレイアウト編集等
写真	大石芳野	(社)日本写真家協会会員 フォト・ジャーナリスト	写真一般
	小林信行	東京都生活文化局 広報広聴部広報課写真担当係長	行政広報写真等
映像	関 裕敏	(株)電通 第4クリエイティブ局長	広告企画・制作
	高橋幸作	(株)NHKエデュケーショナル 特集文化部統括プロデューサー	映像企画・制作

平成23年度東京都広報コンクール入選作品一覧

部門		賞	区市町村名	作品名	全国推薦
1 広報紙 (35)	(1)区市部 (31)	最優秀	大田区	「おおた区報」9月1日号	○
		一席	品川区	「広報しながわ」2月21日号	○
	(2)町村部 (4)	二席	文京区	「区報ぶんきょう」5月25日号	
			板橋区	「広報いたばし」3月5日号	
2 写真 (26)	(1)一枚写真の部 (13)	最優秀	足立区	「あだち広報」1月25日号	○
		一席	八王子市	「広報はちおうじ」6月15日号	
		二席	大田区	「おおた区報」10月11日号	
			瑞穂町	「広報みずほ」8月1日号	
	(2)組み写真の部 (13)	最優秀	足立区	「あだち広報」4月10号	○
		一席	千代田区	「広報ちよだ」2月5日号	
		二席	墨田区	「墨田区のお知らせ「すみだ」」9月1日号	
3 映像 (16)		最優秀	江東区	道路ができるまで	○
		一席	墨田区	平和への誓いと願い～25万人の平和メッセージ	
		二席	足立区	あだち広報「みてみてあだち」7月放映分	
			江戸川区	江戸川区民ニュース平成23年度特別番組 友好の絆をいつまでも～江戸川区・鶴岡市友好都市盟約30周年～	

* 表中()内の数字は応募作品数。なお、全部門を通しての応募区市町村数は39(区市町村)。

* 全国推薦は、入選作品のうち、全国広報コンクール応募要領の応募基準に該当する各部門の上位作品とする。

広 報 紙 部 門

〈広報紙部門 総評〉

●大井委員

2011 年 3 月 11 日 14 時 46 分に発災し、東北地方と関東地方の太平洋沿岸部を中心に各地に壊滅的な被害をもたらした「東日本大震災」は、これまでの社会のありようだけでなく、人間の生き方を改めて問い直す極めて重要な契機となった。年が明け 10 か月が経過したが、被災地は復興には程遠く、その爪痕を至る所に残し、目に見えぬ放射能の恐怖はなお続いている。

3.11 東日本大震災はまた、既存の社会制度や政治制度の価値が問い直される契機にもなった。興味深い調査結果を紹介しよう。博報堂は、大震災から一か月後に行った「生活と消費に関する意識・行動についての調査」で、大震災を契機に「有難さや大切さ、すばらしさを感じるようになったもの」(A)と、逆に「自分にとって意味や有難みがない、あるいは頼りにできない、とを感じるようになったもの」(B)を尋ねている。いわば社会資本やメディアに対する価値観の変化があったかどうかを問うている。大半の人びとがその価値を再確認したものは、「生きていること」(Aは 72.9%、Bは 0.7%)「平凡な毎日」(A69.4%、B0.8%)「健康」(A70.2%、B0.4%)や「電力」(A75.7%、B9.7%)「ガス」(A52.2%、B2.7%)の社会インフラの有難さで、「家族」(A71.7%、B0.0%)「友人」(A50.9%、B0.4%)そして「ご近所、地域社会」(A33.7%、B1.8%)の大切さ、そして「日本人」(A41.5%、B1.6%)のすばらしさであった。「新聞」(A34.0%、B4.4%)「テレビのニュース番組」(A47.2%、B9.0%)もその価値が見直された。

他方で、「意味や有難みが減じた、頼りにできなと感じられるようになったもの」で目立つのは「日本政府」(A3.1%、B54.4%)や、「テレビのワイドショー番組」(A8.5%、B24.0%)であり、功罪両面が感じられたのは、「地方自治体」(A13.4%、B13.1%)や「科学技術」(A16.4%、B15.3%)であった。

〈広報紙部門 総評〉

これらの数字は一体何を物語っているのだろうか。社会制度であれ政治制度であれ、制度によせられる信頼性は、制度にとって死活的な価値をもつ。昨年度までの「総評」では具体的な感想やら評価を述べてきたが、あえて今年度はこれらには触れない。広報紙担当者にとっても、基礎自治体という制度にとって重要な資源である「信頼性」をどう構築し、維持発展させるかの根源的な問題を、3.11 東日本大震災は問いかけているのではあるまいか。

〈広報紙部門 総評〉

●長岡委員

行政が伝える情報には、セグメントした住民向けとエリアを対象にした「狭報」と、広範囲の住民とエリアを対象にした「広報」との2つ情報がある。情報をより分かりやすく伝え訴求効果を上げるために、誰に何をどのように伝えるか、編集手法として「狭報」と「広報」の使い分けが求められる。「狭報」と「広報」とでは、おのずと企画・文章の表現・視覚面等の編集は違ってくる。

その視点で審査紙を読むと、「狭報」では介護・子育て・障害者情報、「広報」では防災・健康・基本施策情報等で、編集切り口の使い分けを見ることが出来る。年々向上する企画と編集スキルを見て取れる。

紙面デザインの特徴も、デザインの基本となる縦組の本文組みから横組に変更する紙面デザインが年々増えている。変更理由としては、縦組に対して横組は文字情報量が多く入れられる、文中に数字を入れる場合が多くなってきた、表組・グラフ等で横組みベースの図版を多く取り入れた、住民に横組に対する抵抗感が薄れた等が挙げられよう。また、紙面表現も新聞スタイルから冊子スタイルへと、大胆な表現レイアウトが出来るスタイルへの変更が応募作に数多く見て取れる。

行政施策も住民参画が必須である。現在の広報紙は、「広報」から住民参画の「共報」へと変化を遂げている。行政と住民を繋ぐ広報メディア「広報紙」の役割はますます重要であり、広報担当者の担う責は大きい。その意味で「共報」をより発展させる意味でも、住民視点での企画と紙面編集に広報担当者のさらなるスキル向上に期待したい。

平成23年度東京都広報コンクール 広報紙部門 入選作品



最優秀 大田区

おおた区報 平成23年9月1日号

発行部数(回数):326, 800部(35回)

判型(ページ数):タブロイド判(4又は8ページ)

担当者数:3人(専任3人)

●第1面の「おおたの食育って?」は、ごちゃごちゃしているように見えそうな際どいレイアウトが成功したのではないかと。様々な場での取り組みが、多角的に紹介され、楽しく食べよう、豊かに生きよう、という「おおた健康プラン」(平成23～25年)、「食育(食育推進基本方針)」が分かりやすく読みやすくまとめられている。(大井)

●1面は、区の食育施策が分かる紙面であるが、訴求効果をより上げるために施策内容の詳細を語りたい。表現面は、カラフルな色使い、写真、イラスト、紙面デザイン処理等が優れており、インパクトがある。また他の面も、訴求内容に応じた台割、見出しに用いたフォント、可読性のある文字組み等、紙面表現力のスキルは高い。(長岡)



第一席 品川区

広報しながわ 平成23年2月21日号

発行部数(回数):158, 000部(39回)

判型(ページ数):タブロイド判(8ページ)

担当者数:3人(専任3人、兼任0人)

●第1面の「いま、品川区では」は、21日号において毎回テーマ設定、区の「動き」を伝える企画とのことだが、応募作の「世界に誇れる技術力 品川区のものづくり」は読みごたえのある好企画。品川区はじめて物語も、区とモノづくりの歴史を絡ませるさりげない記事だが企画に立体感を生み出している。(大井)

●企業に向けた広報は、住民への広報と共に大切である。1～3面の企画は、住民には企業の認知を図り、一方で企業には区の企業向け施策を訴求している。上手な編集である。表現面も、写真の使い方、視覚的なフォントの用い方、レイアウト処理等、スキルは高い。他の面も視覚的なメリハリがあり、分かりやすい紙面構成である。(長岡)

平成23年度東京都広報コンクール 広報紙部門 入選作品



第二席 文京区

区報ぶんきょう 平成23年5月25日号

発行部数(回数): 117, 800部(24回)

判型(ページ数): タブロイド判(4ページ)

担当者数: 5人(専任3人、兼任2人)

●第1、2面の「ちょっとのおせっかい」みんなで支えあう地域の絆は、区の「高齢者安心見守りネット」構築に関する記事だが、イラストの効果もあって多角的な取り組みが要領よくまとめられており、読みやすく分かりやすい。4、5面の各課からの情報提供は、種類やジャンルごとに再整理したらどうだろうか。(大井)

●住民アンケートを反映させた台割は、適切な紙面構成である。高齢者施策の面は、分かりやすい編集と共に、情報の整理、イラストの活用、色の用い方等、優れた紙面表現である。クロスメディアを活用した広報活動姿勢に好感が持てる。欲を言えば、広報紙とメディア間を繋ぐハブ機能として、他メディアの情報も紙面で紹介したい。(長岡)



第二席 板橋区

広報いたばし 平成23年3月5日号

発行部数(回数): 204, 000部(49回)

判型(ページ数): タブロイド判(4又は8ページ)

担当者数: 8人(専任6人、兼任2人)

●応募作は、発行2000号記念特集号、I LOVE いたばし。記念号らしさあふれる作品に仕上がった。表紙の写真は、体験モデルやサポーターというが、非常に魅力的で引き込まれる。4、5面の広報紙の歴史や製作の裏側紹介は、まともすぎるくらいオーソドックスであるが、それが紙面の力強さを生み出している。(大井)

●2000号記念企画は、広報紙の広報を考えた好企画である。表紙を飾った住民、住民の意見、制作紹介、年譜等、読んで見て楽しい編集が施されている。視覚表現もアテンションのある大胆な紙面で、デザイン技量が高い。一方、1色面は、タイトルに様々なフォントを用いているため目移りする紙面で注意したい。(長岡)

写 真 部 門

〈写真部門 総評〉

●大石委員

今年度についてもレベルが上がっているおり、選ぶのに嬉しい苦労がある。特にデザインが良くなっている。年に何回か写真をカラー化したり、また写真を大きく見せることができている自治体はよかった。

組み写真については、写真を多く使いすぎ散漫になっている作品が見られた。写真の点数を絞り込み、メリハリを付けてほしい。初めて紙面を見る人を惹きつけるような工夫が必要である。

●小林委員

一枚写真部門、組み写真部門ともに年々写真の質が上がってきている。

しかしながら、トリミングの仕方を変えることで更に良くなる写真が多かった。使用する写真の中で、見せたい部分を強調させるためにはトリミングも重要なポイントとなる。さらに、印刷時にオリジナル写真の良さを失わせているものも数点見受けられた。印刷会社との色校正等は十分に行ないたい。

「組み写真」について、写真の点数が多すぎるものが見受けられた。一つのテーマにあまり多くの写真を使用すると、写真個々の良さが隠れてしまう。「組み写真」は良い写真を並べるだけでなく、複数の写真でメッセージ性を強めるものである。テーマに直接関係しない写真は、テーマ写真から距離をとるなどの工夫も必要であり、そうでなければ、かえってテーマに対するイメージがマイナスとなる。

平成23年度東京都広報コンクール 写真部門(一枚写真の部)入選作品

最優秀

区市町村名	足立区
広報紙名・掲載号	あだち広報 平成23年1月25日号
意図	足立区では、たくさんの障がい者が暮らしている。企業や障がい者施設で働く人もいるが、働く場が十分ではない現状がある。この号の企画では、多くの障がい者が働く障がい者施設の仕事を紹介することで、障がい者の置かれている状況を知ってもらおうと共に、直接的な効果として障がい者施設への仕事の注文につながることを意図した。 1面は、障がい者施設の製品の魅力を押し出し、8・9面の記事に誘導するため、施設の中でも特に人気があるパンの製造施設で働く人を被写体とした。美味しそうなパンを見て「買いたい」、作っている人を見て「この人たちが作っているんだ」と、製品と製造者をリンクして見せることを狙った。タイトルも、美味しそうなパンを作る人の写真だけに終わらぬよう、目をとめて意味を考えさせるタイトルとし、リードで補うことで、8・9面へ誘導している。 製造中は黙々と下を向いて作業をこなす上、マスクで表情が見えない。そのため、実際の作業工程にはない場面だが、パンを持ってもらい撮影した。パンが美味しそうに見えるよう、焼きたてのパンを使い、構図にこだわった。結果、「パンが好き」で「パン作りの仕事が好き」と語る、パンを作る障がい者の生き生きとした表情を撮影できた。 施設側からは、障がい者を大きく掲載することをためらう声もあったが、写真を見せて主旨を理解してもらえた。障がい者本人や家族も喜び、仕事への意欲も増したという。また、区民からの問い合わせが多く、施設への注文数も増えるなどの大きな反響があった。
審査委員コメント	●印刷で写真が眠くなるのはもったいなかったが、二人の表情がとても良い。特に男の人の表情は、その瞬間をよく捉えている。 ●仕事のやりがいや伝わる写真である。トリミングの仕方が大変良い。写真を大きく扱っており効果的な紙面構成になっている。オリジナル写真にインパクトがあるが、印刷後の色がくすんでしまっているのが惜しかった。

第一席

区市町村名	八王子市
広報紙名・掲載号	広報はちおうじ 平成23年6月15日号
意図	原子力発電所の災害により、電力需給がひっ迫し、計画停電が実施された。夏は電力需要のピークとなる季節で、国全体で節電対策を実施しなければ、ブラックアウトという最悪の事態も招きかねない状況であった。 本市は、都内でも計画停電が実施された地域であり、電力が不可欠な医療機器などを常時使用している方への対応など、全庁をあげてその対策に取り組んでいた。 そうした状況の中で市は、ブラックアウトの回避はもちろん、病院や交通網など、市民生活に重大な影響を及ぼした計画停電を回避するためにも、市民の皆さんに徹底節電を呼びかけた。出品写真はその記事の表紙に入れた1枚。『真に電気が必要な人のために』というメッセージを込めた。
審査委員コメント	●この写真はとても良い。特に、医師の顔がアンダーになることでうまく表現されている。キャッチフレーズとの関係で写真がわかりやすく、節電の必要性が迫ってくる写真である。 ●写真のサイズが大きく扱われていて、効果的な表現が伝わってくる。震災後の電気、医療を考えさせられる写真である。テーマと写真が融合しとても分かり易い。 しかしながら、モノクロであるため医師の表情が暗くなってしまった。全体的に写真のトーンを明るくしても良かった。

平成23年度東京都広報コンクール 写真部門(一枚写真の部)入選作品

第二席

区市町村名	大田区
広報紙名・掲載号	おおた区報 平成23年10月11日号
意図	待機児童解消に向けて、多様なニーズに応える保育サービスの充実、子育て環境の整備について1面特集を組んだ。その紙面にふさわしいように、グループ保育室で保育ママと保育されている子どもの微笑ましい写真を掲載した。
審査委員コメント	●被写体の二人とも表情などがとても良い。下に映っている男の子の存在も良いので、広報紙に含めてもよかったのではないかな。 ●保育所の良い環境の中で生活している子どもの、良い表情を良く捉えた微笑ましい写真である。オリジナル写真に写っている遊具の一部がカットされているのが少し残念である。

第二席

区市町村名	瑞穂町
広報紙名・掲載号	広報みずほ 平成23年8月1日号
意図	この写真は、町の夏の風物詩である「夏祭り」の一コマです。神輿を担ぐ人々の豊かな表情を前面に、延々と続く行列を後方に収め、夏祭りの活気とにぎわいが伝わるように撮影しました。 皆で団結し力強く神輿を運ぶ姿により、住民の皆さんに元気とパワーをお届けしたいという思いと、この伝統的な行事を若い世代にもアピールし、今後さらに多くの方に参加して欲しいという願いから、表紙への掲載を決めました。
審査委員コメント	●町の熱気が若い人たちの表情からわかる。すごく楽しそうで、つまらないような人がおらず、祭りの雰囲気伝わってくる。 ●祭りの熱気が伝わってくる写真である。祭りに参加している人々の表情も生き生きして気持ちが良い。写真左側の部分の家屋の部分をカットして大胆にトリミングすると、もっと写真に迫力が出てくるだろう。

一枚写真の部 最優秀 あだち広報 平成23年1月25日号



平成23年度東京都広報コンクール 写真部門(一枚写真の部)入選作品

一枚写真の部 第一席 広報はちおうじ 平成23年6月15日号



平成23年度東京都広報コンクール 写真部門(一枚写真の部)入選作品

一枚写真の部 二席 おおた区報 平成23年10月11日号



平成23年度東京都広報コンクール 写真部門(一枚写真の部)入選作品

一枚写真の部 二席 広報みずほ 平成23年8月1日号



おもしろ内容	8月11日(日) みずほサマーフェスティバル	2
	8月12日(日) 敬老会へのお願い	3
	みずほ広報版	4~7
	インフォメーション	8~13
	編・社	16~18
読者委員会からのお知らせ		19~23

あふれる熱気

7月9日・10日に行われた総ア
サ・北阿・富田夕時の3地区風
物では、今年もみこしが大盛
り上がりを見せました。

力強い掛け声をあげながら、
暑さを知らせず大通りを流む
みこしの行列。町は熱気と興奮
に包まれ、真夏の祭典を感じさ
せられました。

(宮城地区1年バージョン)



平成23年度東京都広報コンクール 写真部門(組み写真の部)入選作品

最優秀	区市町村名	足立区
	広報紙名・掲載号	あだち広報 平成23年4月10日号
	意図	東日本大震災に伴い、都内に2カ所設けられた被災者のための避難所の一つが足立区内に開設された。区民に対してだけでなく、東北地方の方々に対しても、足立区が果たすべき役割は大きかった。同時に、被災者のために多くの区民から支援物資が届けられるなど、区民による支援の輪も広がっていた。震災に関するそのような区の状況や姿勢、区民による支援の様子などをお知らせすることで、さらに支援の機運を盛り上げると同時に、今後も拡大する震災被害に対して、区民や被災者に寄り添って支援を続けていく区の姿勢を打ち出すことを意図した。 避難所の写真は、避難者が足立区内にいるという事実とその様子を伝えることで、他人事ではなく身近に感じてもらうことを狙った。支援物資の写真は、体育館いっぱいに積みあがった物資に支援の思いの強さを表現した。また、区内でも帰宅困難者の発生や塀の倒壊などの地震被害、計画停電などの影響が発生しており、区は対応を行ってきた。その情報が不足しているため、読者への情報量を増やすための記録写真などもできるだけ盛り込んだ。 撮影にあたっては、被写体を人物と物、構図を引きと寄り、カメラポジションを上下させるなどのバランスを意識して臨場感を出し、組むにあたっては写真の大小をつけてインパクトを出すなど、雰囲気が少しでも伝わるように工夫している。
	審査委員コメント	●震災に対して、きめの細かい支援をしている姿が伝わってくる組み写真である。一都民として、写真を見ると嬉しくなる。ドーナッツを食べている子供がポイントとして良い。 ●被災地への支援状況が分かりやすく構成されている。写真のトリミングにも無駄がなく、うまく撮影されている。欲を言えば、もう少し写真内容に動きが欲しかった。また、写真の点数を絞ることでメインの写真に対する印象がさらに強く残るようになると思う。

平成23年度東京都広報コンクール 写真部門(組み写真の部)入選作品

第一席

区市町村名	千代田区
広報紙名・掲載号	広報ちよだ 平成23年2月5日号
意図	■ちよだ地球市民ツアー ベトナムでの体験を報告 千代田区では、国際協力活動の現場を訪問し、活動に関わる人や現地の人々との交流を通して、環境・貧困・平和・人権等に対し、主体的に考え、積極的に行動することができる人材の育成等を目的として、ちよだ地球市民ツアーを行っています。 今回の記事は、ツアーの貴重な経験を、区内に住み・学び・働く方々と共有するためのものです。写真を多用し、視覚に訴え、少しでも多くのことを感じ・学んでもらうことを意図しています。 また、写真をきっかけに、読者が記事を読み、国際協力や異文化・戦争が与える影響などに関心を持ち、家族や子どもたちの間で話し合うきっかけ作りになればと思います。今回の写真を掲載しました。
審査委員コメント	●企画がとても良く、傷が残っているベトナムや昔ながらの文化が伝わってくる。写真はどれも良く撮れており、上手く表現できている。 ●組み写真としてまとまっており、国際交流の雰囲気が伝わってくる。紙面を読んだ区民も参加したくなるのではないかな。 ただ、同じような画角の写真が多いため変化が乏しい。アップの写真を入れるなど、写真の内容に変化をつけるとより良くなるだろう。

第二席

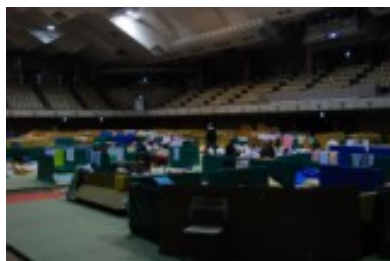
区市町村名	墨田区
広報紙名・掲載号	墨田区のお知らせ「すみだ」 平成23年9月1日号
意図	子どもの健やかな成長には、保護者や学校の先生だけでなく“地域の大人が関わることが大切だ”ということを伝えるために、視覚的にインパクトがあるように多くの写真を使い、様々な活動の様子を紹介しました。 まず、“遊び”を支える「放課後子ども教室事業」の紹介では、子どものあふれる笑顔と元気いっぱいの写真を動きのあるレイアウトで伝え、あわせて「子どもの笑顔に疲れも吹き飛ばす」というスタッフの言葉を添え、この記事を読んだ方が、私も地域の子どものために手伝ってみようと思ってくれるきっかけになることをねらいました。 次に、“学び”を支える「放課後学習クラブ事業」の紹介では、担い手となるスクールサポートティーチャーに関心をもっていただけるよう、多くの講座で撮影し、座学だけでなく、実践活動の様子を組み写真で伝えました。さらに、受講しなくては損だという、受講生からのオススメを文章だけでなく、私が自信をもって推薦しているという信頼を増すために、顔写真入りで紹介しました。 全体の構成として、遊びの支援が得意な方、学びの支援が得意な方、どちらのタイプの方も自分が得意な分野で、地域の子どものサポートできることを伝えるため、写真を文章や表に組み込み、バランス良く配置しました。
審査委員コメント	●どれも子供の笑顔がいい。しかしながら、写真を多く使うことで散漫さが出てくる。写真の枚数を絞り、メリハリをつけた方が、関係者以外の人たちの目を引く。知らない人たちが目を引く方法を考える工夫をさらに行なってほしい。 ●子どもたちの明るい表情を捉えた写真はとても良い。笑い声が聞こえてくるようである。ただ、「遊び」のほうは写真の点数をもう少し絞ってもいいと思う。また、「学び」のほうでは写真だけでは内容が伝わりにくいものがある。

平成23年度東京都広報コンクール 写真部門(組み写真の部) 入選作品

組み写真の部 最優秀 あだち広報 平成23年4月10日号



(1/13)



(3/13)



(2/13)



(4/13)



平成23年度東京都広報コンクール 写真部門(組み写真の部) 入選作品

組み写真の部 最優秀 あだち広報 平成23年4月10日号

(5/13)



(6/13)



(7/13)



(8/13)



(9/13)



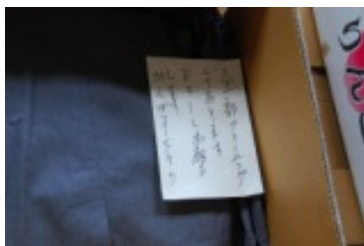
(10/13)



(11/13)



(12/13)



(13/13)



組み写真の部 第一席 広報ちよだ 平成23年2月5日号

[illegible]

平成23年度東京都広報コンクール 写真部門(組み写真の部) 入選作品

組み写真の部 第一席 広報ちよだ 平成23年2月5日号

(1/9)



(2/9)



(3/9)



(4/9)



(5/9)



(6/9)



(7/9)



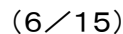
(8/9)



(9/9)



組写真の部 第二席 墨田区のお知らせ「すみだ」 平成23年9月1日号



平成23年度東京都広報コンクール 写真部門(組み写真の部) 入選作品

組み写真の部 第二席 墨田区のお知らせ「すみだ」 平成23年9月1日号

(7/15)



(8/15)



(9/15)



(10/15)



(11/15)



(12/15)



(13/15)



(14/15)



(15/15)



映 像 部 門

〈映像部門 総評〉

●関委員

今回、制作意図に「行政制作の広報番組らしくない番組」というフレーズがありました。若い制作スタッフの声なのではないでしょうか。ここでいう「行政制作らしくない」というのはどういう意味でしょう。パターン化した正しいけれど面白みがない番組、たとえば視聴率などとは無縁の一方的な広報、というような。WEB全盛SNSも大きく広がりつつある今、「行政制作」も「らしくない」ことへの挑戦をすべき時がきていると思います。視聴者を強く意識し番組のクオリティーを上げてゆく。インタビューひとつとっても、どういうやり方が一番良い話を聞けるのか。生の言葉を引き出せるのかを追及してみる。良くてきたドキュメンタリーと同じ土俵であると考えてみる。今回拝見した作品で、取材する人物にどこまで説明を依頼すべきかの判断ができていないものが多く見られました。ある意味「行政制作」的なご愛敬ともいえ、目くじら立てることではないのかも知れませんが、視聴者の立場から見ると、聞きづらく、広報効果も半減すると思います。制作の必要性、企画の妥当性も精査されるべきと思います。区の予算を使うからには区民の為になる広報を第一義に。また「行政がやらなければ誰がやる」という企画もあるでしょう。そこまでの使命感があればまた素晴らしい。いい意味で「行政制作らしい」と言えるでしょう。製作費的な縛りもきつく難しい点も多いとは思いますが、「もっと良くなれないか」の問いかけを常にしていただきたいと思います。そのほうが制作者としても楽しく、見る側も嬉しい、良い循環が生まれるからです。そういう意味で、テーマ選び、クオリティーの向上、面白さの追求で「行政制作らしくなさ」にチャレンジしている作品を高く評価しました。

〈映像部門 総評〉

●高橋委員

今年度、振り返ると日本は受難の年だった。東日本大震災とそれに続く福島原発事故による気持の落ち込み、暗さは一時日本中を覆った。いや、今でもその霧は吹っ切れたとは言いがたい。しかし、一面、政治、行政、経済、地域、人間関係、深層心理等々、普段はあまり考えないような事まで人々は考えるようになった。私は、このことが唯一日本の未来にとって救いだという気がしている。何も考えずに、暮らしていける時代はとうに終わっていたのだ、ということにこの災害は皮肉にも気付かせてくれたのだ。

広報番組の映像を見させてもらったが、今年度の映像コンクールにどういう気分で出品されたのか、今までの通りで良いのか？何世紀に一回の災害、それも原子力事故も加わった災害に、新たなリアクションを広報番組にも加味するべきか？など、私の見る限りではあるが、そういった問題意識をもった作品は少なかった。当然ながらジャーナリズムでもある広報番組としては、まず地域の防災問題の再点検、線量ホットスポットはあるのか、水道水などの汚染の有無、被災地の瓦礫の受け入れ問題などなど、数え上げればキリがないが、地域の住民が一番知りたい事、それも早く知りたい事、あるいはその地域と密接な関わりがある事項を積極的に網羅して、住民の考える一助として欲しかった。はっきり言って、今回は全部の番組が震災の影響一色になってしまうんじゃないか、と思っていたので私は拍子抜けしてしまった。感動した作品は、その中でも今回の震災を我が事のように意識していると思われた作品で、特に人間同士の絆の強さを感じられた作品に高評価を付けさせてもらった。

平成23年度東京都広報コンクール 映像部門 入選作品

最優秀

区市町村名	江東区
題名	道路ができるまで
時間・制作方法	20分・委託制作
主な内容	昨年9月から今年5月まで、9ヶ月間に渡って行われた道路工事の様子を追う。今回は、約270mの道路の補修工事に密着。この道路は、前回の補修工事から30年以上が経過し老朽化が激しかったこと、前回補修時は今ほどバリアフリーが浸透しておらず、改善に向けての地域住民からの要望が根強かったことから工事実施に至った。補修工事の各工程がどのような目的で行われているのか、詳しく説明。工事現場の様子に加え、関係機関による調整会議や地元説明会などの一連の流れを取り上げ、最後に担当者より区民に対し工事への理解を呼びかける。
制作意図	区民にとって目にする機会の多い道路工事だが、各工程がどのような目的で行われているのか、具体的に知る機会は少ない。とすると、騒音の発生や、通行が不便になるなど、マイナスイメージが先行しがちである。そこで、実はよく知らない道路工事の一連の流れを詳しく紹介。道路工事の必要性を伝え、区民の工事に対する理解を呼びかけるために制作した。
審査委員コメント	●何かと迷惑に思われる道路工事の必要性を解説し区民の理解を呼び掛ける。今回補修対象となった道路工事に9カ月密着。調整会議から始まり、測量、設計、地元説明会、そして工事、とその工程を現場取材、ナレーションと道路課職員へのインタビューで順を追って説明されている。30年前には予想できなかったゲリラ豪雨、ヒートアイランド現象、バリアフリー、の対策や、落葉しない街路樹への植え替えなど、改修のポイントを知ることで理解の高まりを実感できた。全体に普段知り得ない情報なので、興味は持続するが、やや淡々と進みがちで、もう少しメリハリをつけコンパクトにまとめられるのではないかな。（関） ●9か月に渡る長期取材の番組。一般にはあまり知られていない道路補修工事の全工程に密着し、この手の工事に伴う迷惑感を一掃し、区民に一層の理解を得るのが目的だという。結論から言うと、分かりやすく、大変ためになった。知らなかった事も多く、江東区に限らず、一般的な情報としても重要だと感じた。演出的にも手堅く、けれんみの無い手法に好感が持てた。（高橋）

平成23年度東京都広報コンクール 映像部門 入選作品

第一席

区市町村名	墨田区
題名	平和への誓いと願い ～25万人の平和メッセージ～
時間・制作方法	15分・委託制作
主な内容	震災・戦災という2度の悲惨な経験をした墨田区では、平成元年に「墨田区平和福祉都市づくり宣言」を行い、「世界の平和とひとびとの福祉向上の実現に一層努力すること」を誓った。区ではこの宣言の趣旨の実現に向けて、東京大空襲のあった3月に平和祈念行事として平成4年から「平和メッセージ事業」を開催している。この事業が今年で20回目を迎えたことを機に、事業が始まった背景や歴史、また事業に関わっている人たちの活動やその思い等について紹介する。
制作意図	墨田区では、平成4年から「平和メッセージ事業」を行っている。その事業が今年で20回目を迎えたことを機に、事業が始まった背景と歴史を紹介する。また、平和メッセージ事業の柱の一つである「平和のオブジェ」制作に関わったボランティアの人々や、「平和メッセージ」を寄せた人々等のインタビューを通し、区や地域の人々の平和への願いを広く伝える。
審査委員コメント	●区役所の外観からエントランスをくぐりアトリウムで行われている平和祈念コンサートに至るオープニングのワンカットは期待感をそそる。その背景には区民25万人の手による折り鶴でつくられた壮大な平和のオブジェ。関東大震災と東京大空襲によって多大な被害を受けた墨田区ならではの平和への思いが、いろいろな角度から描かれる。平和メッセージの展示、後世に伝える義務があると、ボランティアで体験を語り続ける戦争孤児であった方との座談会。インタビューのリアルな語りが涙を誘うまでの作りとなっている。全体を通し区レベルで取り組む平和祈念の活動の意義が伝わる丁寧な作りであった。音楽の使い方もちの確。（関） ●平成元年に発足した墨田区の25万人が一人一人メッセージを送る平和福祉都市づくり宣言。戦災、震災を越えて来た墨田区では、この宣言の実現に向けた「平和メッセージ事業」を開催して今年で20年目になる。折り鶴でつくる平和オブジェなど、区民の平和希求の強さが伝わってくる映像が並ぶ。何か特別なことが起こる訳ではないのだが、カメラ、音声、編集と息も合っており、区民のメッセージが見る側に直接伝わってくる。（高橋）

平成23年度東京都広報コンクール 映像部門 入選作品

第二席

区市町村名	足立区
題名	あだち広報 「みてみてあだち」 7月放映分
時間・制作方法	30分・委託制作
主な内容	23年度から放映をスタートした「みてみてあだち」。ショートコンテンツによって構成した広報番組の7月放映分。 足立区中央本町出身のお笑い芸人、しずる村上純さんが、区内で暮らしていた当時の思い出を語りながらナビゲート。 その他のコンテンツは、区内のさまざまなNo.1を紹介する「ピカピカNo.1（世界に誇る技術を持った町工場特集）」、区役所の担当者にわからないことを質問する「もしもし担当さん（あだち夏チェンジ大作戦）」、区内のイベント等のニュース、区のゆるキャラのキューカットで構成している。
制作意図	目指したのは、「行政制作の広報番組らしくない番組」。複数のコンテンツを通して、視聴者の反響を呼ぶ内容を考えた。 ケーブルテレビだけではなく、動画配信や大型ビジョンでの放映も視野に入れ、ショートコンテンツの形式にした。 【ナビゲーターのコーナー】ゆかりの著名人に幼い頃の思い出の地について愛着をもって語ってもらうことで、身近な地域の新たな魅力を伝える。 【ピカピカNo.1】今回は、ナンバー1技術が光る町工場に注目。調査員と「指令」を探る形式をとることで興味を引きながら、地域への誇りを養う内容を目指した。 【もしもし担当さん】CGのおばあさんキャラクターが区役所の職員に尋ねることで、わかりやすく区の事業を紹介。 【キューカット】区のゆるキャラや人形を登場させ、行政制作の広報番組らしくない意外さ、アクセントをもたせた。
審査委員コメント	●目指したのは「行政制作の広報番組らしくない番組」との制作意図通り、新しい方向性を示唆するつくりとなっている。ショートコンテンツによる構成は、いまどきのテンポ感にあっていて30分を飽きさせない。節電の施策がプレゼントキャンペーンになっていたり、学校給食メニューを出版したり、オリジナルお買い物ゲームを制作したりと、取り上げられているテーマからも全体に区が新しく変わろうとしている姿勢がうかがわれる。情報を楽しく伝える見る人を強く意識した広報、若者や子供たちにも伝わることへのチャレンジを買う。民放バラエティーも進化が激しい今、競って見てもらうための工夫はどんどんなされるべきだと思う。（関） ●「みてあだ！」という軽いノリで行政の広報番組らしくない番組を目指したという。足立区中央本町出身のお笑い芸人の村上純が案内する。「もしもし担当さん」「ピカピカNo.1」など、コーナーに分かれていて、快調な進行と共に、楽しく分かりやすい内容となっている。「サファイアグラス」や「二輪駆動自転車」など生活に役立つ情報もあり、実用番組的側面もある。しかし、番組を30分という長さにしたことは再検討してもいいだろう。（高橋）

平成23年度東京都広報コンクール 映像部門 入選作品

第二席

区市町村名	江戸川区
題名	えどがわ区民ニュース平成23年度特別番組 友好の絆をいつまでも～江戸川区・鶴岡市友好都市盟約30周年～
時間・制作方法	2 1 分 3 4 秒・委託制作
主な内容	戦時中の学童疎開が縁で始まった江戸川区と鶴岡市の交流は、昭和56年に友好都市盟約が締結され、今年で30周年を迎えました。 区では、学童疎開でお世話になった感謝の気持ちを込めて、盟約締結時に「其恵不忘」（その恵み忘れず）の額を鶴岡市に贈り、以来、様々な形で交流が行われてきました。 今回の番組では、こうした友好の歴史や区民の皆さんの活動とともに、先日、鶴岡市内で行われた記念の催しの様子や友好の絆を育んできた多くの人の思いを紹介します。
制作意図	今回の番組は、戦時中の集団疎開が縁で始まった江戸川区と山形県鶴岡市の友好都市盟約30周年を記念して制作するものです。 昭和19年、第二次世界大戦の戦火を逃れるため、江戸川区内の小学生約4,500人が山形県鶴岡市で疎開生活を送りました。衣食にも事欠く時代に親元を離れ寂しい毎日でしたが、鶴岡の豊かな土地柄と人々の温かさによって、恵まれた疎開生活を送ることができました。この当時受けたもてなしが現在の江戸川区民の心に残り、終戦後も世代を超え、様々な形で心温まる交流が行われています。 こうした絆をより一層深めるべく、番組内では実際に疎開生活を送った方々の思い出やボランティア交流などの活動を紹介し、区民に両区市の友好関係を広く理解してもらい、活動の更なる進展を図るため制作に取り組みました。
審査委員コメント	●戦時中の学童疎開が縁で始まった江戸川区と山形県鶴岡市の友好都市盟約30周年記念特別番組。「江戸川区の学童疎開」という区史の文献の朗読から始まり、鶴岡市の紹介、疎開当時のいきさつへ。疎開された方々と受け入れた方々がそれぞれ交流会を立ち上げ大きく広がり友好都市盟約締結の運びに。小学校の5、6年からの付き合いとなるお二人の語りは胸を打つものがあった。現在は両都市のボランティア団体も参加し、スポーツ、文化、祭りと、疎開の縁をはるかに超えた活動となり世代が変わっても続く交流に成長している。人々の楽しそうな笑顔からは友好都市の意味合い有用性が強く感じられる。（関） ●戦争中、江戸川区の4500人もの子供たちが鶴岡市に学童疎開したことから始まった両者の長い交流。受け入れた当時の鶴岡の子供たちや大人たち、そして疎開した江戸川区の子供たちとの温かい交流の歴史を紐解き、今や高齢者となった当時の学童たちのインタビューを中心に描いている。疎開団体があることも初めて知ったが、疎開先の同級生同志の交流から輪が広がり、その子供や家族まで交流に加わっている。鶴岡ロケも美しく、金魚放流のエピソードも効いている。今回の震災の被災者も疎開を余儀なくされている人が大勢いる。彼らを支え、希望を与えるのは、まさにこの様な人間の絆の強さだと証明した力作。（高橋）